

伝文

日本口承文芸学会 会報

第 62 号 2018 年 2 月 発行

日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東 4 - 10 - 28

國學院大學文学部 飯倉義之研究室

Tel : 03-5466-0529 (研究室)

Fax : 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail : info@ko-sho.org

卵生神話と袋子

飯島 吉晴

朝鮮半島や北方民族の建国神話の特徴の一つとして、始祖が卵の形で生まれたという卵生神話があげられる。これには、一体どういう意味があるのか考えてみたい。たとえば、モンゴル系の遊牧狩猟民族である扶余（「鹿」の意味という）族は、紀元前 2 世紀末に中国北東部に南下してツングース系の諸民族を征服して扶余国を建国するが、4 世紀には滅び、狄の王族が逃れて東扶余国を建てる。此の東扶余国の王子が朝鮮半島に移住して馬韓を統一し百済となった。扶余族には、王の不在中に侍女が孕んだので、王は殺そうとするが、侍女は天から大きな鶏卵のようなものが降りてきて身籠ったと弁明して許される。やがて男子が生まれるが、王は嫌って豚のいる厠や厩に放置するが死なず、神とみなされるようになる。成長した男子は勇猛で弓がうまく、王は再び勇猛さを恐れて殺そうとするが、其の子は南に逃げて魚や鼈の助けで川を渡り王となったという。殷の祖契もその母簡狄が玄鳥を飲み込んで生まれたとされている。東夷の諸国の中の徐夷は山東半島内陸部の淮河流域に住み周に滅ぼされたが、やはり卵生神話が伝えられていた。徐国の宮人が孕んで卵を生み、不祥として遺棄されるが、犬が啗えて母親のもとに戻す。母は異となしこれを暖めて子を成す。長じて仁智に優れ、後を継いで徐君となったという。

高句麗を建国した高朱蒙もやはり卵から誕生している。扶余（東扶余）王金蛙が太白山の麓の優渤水で河伯（河の神）の女柳花と出会う。天帝の子解慕漱と私通し放置されたのである。金蛙がこの女を部屋に幽閉しておく、日光に感精して孕み大卵を生む。その卵から生まれたのが朱蒙（弓をよくする人の意）で、その後種々の試練と苦難を克服して南下し高句麗を建国したのである。新羅の始祖朴赫居世（光り輝く君）も卵から生まれた神童であった。新羅 6 村の人々が閼川の岸辺で会議をしていると、楊山の麓の林の中に光とともに白馬と大卵が天降り、そこから神童が生まれ新羅の初代王となった。因みに閼と卵は朝鮮語でともにアルという。新羅の賢君 4 代王の昔脱解は倭の出身だが、彼もやはり東海の高麗那国の王と女王国の女が結婚して大卵として生まれ、不祥として卵は箱舟（うつぼ舟）に入れて海に流され、新羅の阿陳浦に漂着した。一老婆が引き上げて箱を開けてみると、中に一人の神童がいた。これが昔脱解で、やがて新羅の王となるのである。

なぜ朝鮮半島の建国神話には多く卵生の始祖が登場するのであろうか。これはイタリアの歴史家ギンズブルグが『閼の歴史』（せりか書房）で明らかにしたように、古来ユーラシア大陸に広く分布する、胞衣に包まれて生まれた子供を異能の子として崇める信仰を背景にもつシャーマニズム的な世界観に由来するものではなかろうか。なお、拙稿『胞衣をかぶって生まれた子供の信仰と民俗』（『モノと図像から探る怪異・妖怪の東西』勉誠出版）も参照されたい。

（東京都）

「逃げる！「恐怖」をめぐる口承文芸学」

第73回研究例会は、2017年11月4日、高千穂大学に於いて「逃げる！「恐怖」をめぐる口承文芸学」をテーマに、日本、中国の逃竄譚や、日本の戦時下における「うわさ」や世間話の逃走譚について、シンポジウム形式で行われた。

はじめに司会、進行役の中村とも子氏が、逃竄譚を通して人間の「恐怖」への対応について考えるという今回の研究例会の趣旨説明後、逃竄譚の研究史として飯倉照平（中国）、剣持弘子（イタリア）、荻原眞子（シベリア）の研究を紹介した。

続いてパネリストの関根綾子氏が、「日本における逃竄譚の特徴」と題して、「三枚のお札」「牛方山姥」「天道さん金の鎖」のモチーフ分析から日本の昔話における逃竄譚の特徴を発表した。関根氏は、上記、三話の類似性、逃竄のモチーフが他の話に利用されやすいことや、蕎麦の根の赤いわけなど由来譚として語られる事例を紹介し、「牛方山姥」＋「三枚のお札」の複合型の昔話は、東北地方に多く、「三枚のお札」＋「天道さん金の鎖」の複合型の昔話は、九州に多いことを資料から指摘した。また、昔話の逃竄譚の背景に、山父など襲う妖怪からの連想、死体化生神話、蓬と菖蒲などの魔除けとの関連があることを示唆した。

立石展大氏は、「中国の昔話から 変婆の話を中心として」と題して、中国の人を食う妖怪譚「変婆」の昔話、世間話の特徴について発表した。はじめに中国の民間文芸研究者、徐華龍「変婆考」や、飯倉照平「中国の人を食う妖怪と日本の山姥」等、先行する変婆譚研究史を概観し、具体的な中国の変婆譚資料から、話の背景に、中国の人々の鬼（死んだ者の魂）、亡霊に対する考え方と信仰が色濃く反映されていることを考察した。また日本の山姥の福神的性格と、変婆の亡霊的性格の相違点や、変婆が、現在もリアルな世間話として話されていることを指摘した。

重信幸彦氏は、「空からの恐怖：爆弾除けの話」と題して、太平洋戦争の戦時下、ラッキョウを食せば、空から降ってくる爆弾に当たらない、爆弾から逃げられるという「うわさ」と俗信の資料から、空爆という銃後の日常の質的变化における民衆の想像力について発表した。重信氏は、佐藤健二の先行研究に触れつつ、「憲兵隊記録」、「新聞記事」などの戦時下の資料群から、戦時下の限られた情報の中で民衆によって話されていた「命に関わる世間話」と、そこから生まれた「爆弾除けの話」の相関関係の分析を通して「銃後の日常とは何か」という世相が問えることを指摘した。また、先の公的な資料ばかりでなく、「高見順日記」など個人の日記を通して、個別の体験としての銃後の日常の世間話にも触れる発表だった。

パネリストの発表後、参加者との質疑応答も活発に行われた。中国の逃竄譚には、年中行事の由来になっている話はあるのか。中国の「変婆の話」から中国での「妖怪談義」研究は可能か。「憲兵隊記録」という資料の心理学的調査方法、国民の戦意を世間話から探るという調査目的など、その資料の意味するところは何か。追っ手が次々に変わる逃竄譚はあるか。逃げきれない逃竄譚はあるかなど、様々な話題が取り上げられて、盛会であった。

（埼玉県）

◆ 個人誌『津軽の民話 落ち穂拾い』のこと ◆

佐々木 達司

事の始まりは引越しだった。書きかけの原稿や未発表の昔話テープなど、雑多な資料が出てきた。いつかは纏めたいと取っておいたものだが、あらかた忘れかけていた。廃棄しては語り手に申しわけない。こうした資料でも必要とする人がいるのではないか。活字にしておけばいつか、誰かの役に立つのでは……。元気だったら5、6年もあれば終わる。今のうちにやろうと思いついたのは、80歳目前だった。

どんな印刷物にしようかと考えて、個人誌にたどり着いた。A5版40ページの小冊子だが、読んでもらうには工夫がいる。表紙にカラー写真を使い、巻頭の「招待席」には虎の威よろしく畏友のエッセイを載せた。誌面の半分を昔話の記録にあて、『津軽口碑集』を読む「俗信散歩」「青森の艶笑譚」を連載にした。わらべ歌、小ばなし、語源考、民俗誌、なんでもありだ。亡くなった仲間をしのぶ「忘れ得ぬ人」欄もある。巻末は「老いのたわごと」、ここなら何を書いても文句は来ないだろう。

これを100部だけ印刷し、私信代わりに口承文芸や語りの会の仲間に送った。非売品とし、国立国会図書館と青森県内の図書館に置いた。部数が少ないと保存される確率が高いだろうという計算も働いている。

2012年3月、第1号を発行したら、たくさんの礼状を頂いた。無料で配っているのだから大方は社交辞令だろうが、なかには内容について質問を頂いたり、研究資料として使ってください方もあった。大黒屋光太夫と徐福の記事は、2つの大学で留学生の研究資料として使われたという。図書館の担当者が関心をもって下さったのも嬉しいことだった。



(写真は第1号と第12号)

本欄の目的に関したことを書く。小誌が縁となって、もう居ないだろうと思っていた伝承の語り手2人と出会えた。昔話を聞き取り、その記録を掲載できたのは望外の喜びだった。また、語りの会と共同で100年前に語られていた昔話の復元作業を進めている。1928年（昭和3）東奥日報「懸賞民話伝説」を再話し、語りへ繋げようという試みである。

年寄りの暇つぶしに6年、12号まで出して昨年10月終刊した。そして資料の整理もあらかた終えた。

（青森県）

事務局便り

○寄贈図書（2017 年 9 月以降拝受）

- ・早川孝太郎『花祭』 角川ソフィア文庫 2017 年 10 月
- ・早川孝太郎『猪・鹿・狸』 角川ソフィア文庫 2017 年 11 月
- ・日本民俗学会『日本民俗学』第 292 号 2017 年 11 月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『民具・マンスリー』第 50 巻 8 号・9 号 2017 年 11 月・12 月
- ・剣持弘子『カレーライスが日本食 わたしの体験的食文化史』

女子栄養大学出版部 2017 年 12 月

○日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東 4 - 10 - 28

國學院大學文学部 飯倉義之研究室

Tel: 03-5466-0529 (研究室)

Fax: 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会 40 周年記念誌

日本口承文芸学会編『こえとことばの現在-口承文芸の歩みと展望-』

(三弥井書店、2017 年)

定価：2,800 円＋税

学会会員価格：2,400 円＋送料 450 円 / 2 冊以上の場合は送料なし

注文申し込み方法について

- (1) 三弥井書店 (TEL 03-3452-8069、FAX 03-3456-0346、<http://www.miyaishoten.co.jp>
吉田智恵宛に直接ご連絡ください。
- (2) 三弥井書店 (〒108-0073 東京都港区三田 3-2-39) ハガキでご注文ください。

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会 H P
(<http://ko-sho.org>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。
入会金なし、年会費 4000 円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。